





凡そ極書の世を行きや牛車も此中あり一は
 智氏の恵を仰ぐは極高し一は就任派を疑はば極高満
 りや一はもよほは極高し一は句意を造るも一はあり一は
 故人の丹津宿舎を忘るは極高し一は神仏不祈極高し一は通し
 一は句の在るは極高し一は後人たるは極高し一は天理の遠極
 高し一はかゝる一はあり一は其門の専縦を極高し一はあり一は
 或家の秘極高し一は其本を極高し一は詳し一は訂正極高し一は
 一を極高し一は極高し一は極高し一は極高し一は極高し一は極高し
 一は極高し一は極高し一は極高し一は極高し一は極高し一は極高し

唐子の首夏

特衛道人誌

早稲田大学
文学部図書

雲英末雄
53-7518

春乃日

櫻見んとくく戸打まあひてお田のうらみは
波一ふきさうくつかりゆは其まの方も又は
いよのうかり重なる枝折せらる行橋わらま
あちよろけのいよのまをわらひ知る

二月十八日

まぬくやんさあくの伊勢
さくらちん中つるく連
おろす正月一向に
鑑かまの火より
志不風ふよりく

荷

重五
李風
昌圭

上ノ年

くり小仲の山石
頃テちん汗此情
まのくかきさ
文王乃を
雨の粟
乳を
傾城
旁を
くやくとの
を
花
折

乳
重五
荷
李
雨
昌
重
李
重

入りたる日午 蝶のそくあり
 うらりとうきまふらう家と連ねて
 不懐り 梓まき ぬれ
 黒髪とあまらぬるやふ切端
 いもくさき 正位乃汁立
 本所ふふ官用門ハらうあまそ
 せうの路も 目くぬ回多
 物細 互腐をさるふらう直片
 念伴さふけふ秋陽いささ
 積翠生ふ葉を位唯平使うく
 つら各を橋の 名りうらる目
 今北内まなまら 晒ハ唇伝

荷兮 李凡 雨相 昌圭 重五 雨相 昌圭 李凡 荷兮 李凡

上ノ一

物態おろく 此家おろく
 ほくまきとあ行をふらあまら
 物細のころを二人くくこき
 世了にらぬ馬屋小年くらあ
 紀念ふらふらふ ぬれ馬乃 昔畑
 いままをさるふらうあまら
 身も 足もさるふらうあまら

雨相 荷兮 昌圭 雨相 重五 昌圭 李凡

三ノ日 六日 野あまら
 本所百地や物うらふの八吉まら
 おりうらふ うきまらうの境
 其れ 旅帯供まらう人 橋まら

止葉 野水 荷兮

口まじくへき清めたるけり
 春風たしむる世の程の病の破
 責のつらき世の思ふもた
 金白き太巻なまるとふけり
 多病の酒ふよひ子目をめく
 表町ゆりて二人髪利ん
 曉りふくまきゆくすし
 鶴負ふて大なる浪かまけ
 舟やう 岡んころふのまき
 菴衣あたまさうをむやうそ
 兼あしをさそ万日おそら
 甲人千尊と旅を結の雨

越人 羽笠 靴 破水 且菴 越人 荷子 且菴 越人 羽笠 靴 破水 越人

上ノ二

月かき 宿子 さまとく梅
 ありとゆめ木の根に花の影
 楓尽せしとむら 温の山
 のけけや 菴草の狭い夢
 内侍入 える代への肩持同
 物思ふ 軍の仲のくさこたふ
 名も うち 西中くちや ちよ
 大なる 念仏もあつ 菴草の 網
 ののおおき 舟もよき 際をさ
 物さ乃 舟もよき 舟もよき
 官古く 世に ちよ ちよ
 一 扱 ちよ ちよ ちよ

羽笠 破水 且菴 越人 荷子 且菴 越人 羽笠 靴 破水 越人

まる塊 きのりきばくの月
 湯冬 のりえのうらうら 支那
 美雨 能く 出た けい
 田舎 ぬらて 花さる 甲に けり
 ちんち の公助をつま 中ね
 湯水 三井乃 末の ぬら
 ちんち のみも ちんち の
 泉のけり 井の泉 泉の
 君乃 つま ぬら

且葉 越人 荷分 羽笠 水 且葉 越人 荷分 羽笠

三月十六日 且葉 田舎 ぬら
 君乃 つま ぬら

野水

上ノ三

窓のあたる さのの西り
 藤高の 雲木の 泉の
 まりく 人を 見る ころの
 まりく のり 波の 舟の 月影
 芋の 穂を 穂の 今ね 皆
 磯ま 磯の 磯の 磯の 磯
 岩の 洞の 磯の 磯の 磯
 雨の 月影 籠屋 籠屋 籠
 ひろし 籠屋 のり 籠屋
 籠屋 のり 籠屋 のり 籠屋
 籠屋 のり 籠屋 のり 籠屋
 籠屋 のり 籠屋 のり 籠屋

且葉 越人 荷分 羽笠 水 且葉 越人 荷分 羽笠

今更の更の更の更の更

同十九日 荷分室ゆく

嘆くけのし園よりけりき白菊を
移乃 ちをちりくく 頃
秋丁のまきまらうく火を赤ね
別の月ふかきくあう こと分
跡そ花四乃 宮よりいそ論を
又ゆくくみちのまきむらう
永き日わ今初を時白さう
葉のう草中あふく雨の中
紹路く瓢はあうそまはなく
連さうのゆきあういそく
流 壺よりは深相まをまきるん

越人 且藁 冬文 荷分 野水 且藁 越人 野水 冬文 越人

上ノ四

岩 苔くろく 流 入 きけられ
むさくろく ちをちりくく 世の中
葉 二枚も ひろきくく 産
おとこの雲あふまきく 産
暮らうち流い送るまねくの月
風のちのさ枝の月舟小網入まよ
冬 羽乃 流のあうく 葉ひみ
あまのこまき流すもやうなぬ
ほろく 一 葉 葉のちをちり
まきまのまあ流かひく 紹て
降をゆりく ちをちり 葉く 代
山は花折のこまき流すもよ

且藁 冬文 越人 野水 且藁 冬文 荷分 野水 且藁 越人 野水 冬文 越人

曇るるをくくも 無言の世あり

荷分

追加

二月十九日舟泉亭

越人

山嵐のわらわき烟のふたれ
蝶あひのふらふらと 出づる
きんぎょを海にまきまきありて
行幸のこゝろありふ 去後
白をまきまきしつ 悲路のゆき
月あき 空あり 門をくく

春

雪を食うよま体く味く
くくくくくくくくくくく

芭蕉 白空

上ノ五

元之のふらふらと 安き世あり
梅のふらふらと 神をまきまき
南浦のふらふらと 秋のふらふらと
其糟のふらふらと 梅露のふらふらと
四騾のふらふらと 利重のふらふらと
重五のふらふらと 昌圭のふらふらと
雨相のふらふらと 舟泉のふらふらと

元之 秋之坊 南浦 其糟 梅露 谷ト 四騾 利重 重五 昌圭 雨相 舟泉

龍の青あめのくくく梅白
 舟く 雲小春ふ雲の鶴うけう
 暎の人白牡丹 中庭ふひききう
 櫻てくま元日甲乃 賭うま
 甲てくくくくくく先の四方の三
 けふとそも小春負ふくく牛の夏
 初日二ふ樹乃 初く白ひくれ
 先明て甲の末ひくま雲
 芥梅てあけく酒きき瓢くれ
 のきくく人の終くくく
 見えくくく白雲のやー夕く
 古池や嘘花あひあけく

羽笠 且葉 杜國 犀夕 吞霞 聽雪 荷兮 全 且葉 越人 芭蕉 上ノ六

今浮乃 賭り 梅蝶 牡丹
 山や花 梅初く の 酒きき
 花ふくくくくくくくくく
 春野吟
 且庭中 梅を曲く 庵 二の
 蘇寺くくくくくくくくく
 櫻はまてまくくくくくく
 銭別
 篠乃 花くくくくくくくく
 山物くくくくくくくくく
 故ひくくくくくくくくく
 夏

重五 魚相 越人 杜國 李風 荷兮 越人 重五 全

やくまきその山の尾はきー
 何鳥さびれく繞てぬる秋は
 くるとるおむの資々の一甲像
 うまうーまふまうーまふのーま
 本行をうーまふまうーまふ
 今成ふまうまてま見まうま
 武花坊をまうま
 まうけまうまうまうま
 邊坂のまうま見まうま
 うまうまうまうまうまの月
 老聃曰知足之足常足
 父るまうまうまのまうま

九白
 李風
 越人
 杜園
 龜飼
 角泉
 内塔
 徳誓
 越人

十一

節はの激西のまうま
 ちまきはまうまのまうま
 昔まうまのまうまのま
 蓮化のまうまのまうま
 曉のまうまのまうま
 夏川のまうまのまうま
 譬喻品之三思安猶如人
 とまうま
 ち月のまうまのまうま
 秋
 資々のまうまのまうま
 食家家のまうま

柳雨
 塵交
 荷牙
 全
 月圭
 重五
 越人
 且葉

越人 越人 野水 越人 芭蕉 雨相
 全 野水 越人 芭蕉 雨相
 待意 具の良きと顔のくまを月かみ
 八時をくける風風の修をカネ
 尾らく今宵もやりのうや秋の月
 山寺のまはりのくわのくまを
 中をわくく人をやまひる月かみ
 下まいてまゝに一入る入る夜は
 月果 おたり びふふ日うな

上ノハ

閑居増感

おん屋ををる香さす見むるん

荷兮

秋ひりの深う柱たるとて産のむら

荷兮

外白のそきと一いんぬりのふけり

舟泉

冬

うらわぬまふふ日れ村たくれ

社園

芭蕉翁を昔より侍りて

大垣住

おのまきまき籠を庵ふ故をせり

如行

雪を糸糸藤の子の落りれ

昌碧

馬をさへかろひて馬のひりこま

芭蕉

の籠乃の藤けてやまきもあふん

越人

芭蕉翁を昔より侍りて

ま乃比のかふくくろく名継うま

杜国

隠士よあつらうるまをのうけて

あつらうるまをのうけて

荷兮

冬乃日

公其也途の雨ふをうひの夜もあつてあつてのわさよ
そめりう 俺津くーううひん 上巻とあつたわさよ
けり昔ねがの女士は國をいじりてはる國をいじりて

ねるあつての男は竹あつてはる

芭蕉

半そりやとそりううさの心もあつた

野水

有月のうさあふ酒やげんをせ

荷兮

あつりの雲をよつあつてはる

重五

ね解乃ふそりきさのあつてはる

杜国

日乃ちりくふ御ふを新

正平

つるいふはあつてはる

野水

上ノ九

髪をよびるるをちのふ男のわさ

芭蕉

いづりりのけりて乳ををりて

重五

きさぬ 幸後あつてはる

荷兮

新法のあつてはる

芭蕉

あつてはる

杜国

田中あつてはる

荷兮

旁あつてはる

野水

たそき返あつてはる

村国

とありさつてはる

堂五

二の厄あつてはる

野水

晴あつてはる

芭蕉

の里物あつてはる

重五

いそぎ根の末をさるるの憂
ぬす人の記念の夢の快楽を
志し宗徳の名をけり
あまほきそをそとほりて水は
冬もれりてひらりて
あましくとさけり人の骨を
鳥賊ハおひさのあつらう
あまほきそをそとほりて
秋も一斗ありつて
日赤の赤白坊月を
中よは程をさるる
うの端ふらふ草の又

荷兮
芭蕉
杜国
荷兮
野水
杜国
重五
野水
芭蕉
重五
荷兮
芭蕉

上ノ十

筆子 勢乃 東の西
けりいこのまゆり
後ひて 吾湯の志賀
麻中 巻れり

杜小
荷兮
野水
杜小
重五

おとしも杜奉

おとしも杜奉

その空乃の
痛り
おとしも杜奉

芭蕉
杜国
荷兮

芭蕉

毎月月神の御敷をなすもらん
 地花をいさすれ 貞徳の翁
 此のゆゑに清和の御理ありて
 眞のまはしんふとていひあまふ
 床あひて語るはのちのちの男
 縁さぬとすなり 櫻子のまへ
 いふもは痛むちまふちまふ
 明日ハクもまふ人の送りきん
 小三ぢらまふちまふちまふ
 月の遅くも 牡丹ぬき人
 魂あつらひていふはなれを
 まめくといふは縁を切らむ

重五 正平 杜国 桧水 荷兮 此の 重五 西蕉 杜田 里五 荷兮
 上ノ十

秋の世のわりの旅乃のわい
 うあついでうのまきやうのいさ
 桜をまふ下座をいふはやりのなる
 うつひも 起をいふは道なりて
 篠あつらひて折れ折れ 葉をいふ
 三枝くもん 不夜の世き人
 乃きまらるるははてあたる基をいふ
 祢さめくのさそも 七十
 を知らぬは重五の金うちあまひ
 ひく川の今すけ下奉りさそ
 草花の一葉の子折ふたすれ
 まさふのまはしん 荷兮

杜国 荷兮 重五 芭蕉 所あ 重五 杜国 重五 荷兮 野水

月うららかに海邊の髪の赤枝
意なき思ふもぬき 臨海をまら
け降る乃 虚にまゐり 静る
藤花実つらふ 木あり ちり
枝より 視をひらき 山あり
ひらり 八曲竹の 扇の 内付
三ヶはねに 鶴尾の 木のこ
まらふこいしむ 越の 柳花枝

荷兮
野水
重五
芭蕉
杜国
重五
荷兮

ほそをひらき 僅し十歩
つらみくわを月うららかに
おろしく ぬきのゆきはぬ

杜国
重五

上ノ十二

當分のあふを初訪人のまゝは扇を
北の山門を おろし わけなる
て 眞柄のふきり 返りて ちり
茶の湯の 心 野邊の 藤花
藤花実つらふ 木あり ちり
枝より 視をひらき 山あり
ひらり 八曲竹の 扇の 内付
三ヶはねに 鶴尾の 木のこ
まらふこいしむ 越の 柳花枝

野水
芭蕉
荷兮
正平
重五
杜国
芭蕉
野水
杜国
荷兮
野水
重五

まつぎをまて清原のあひらつれ行
 佛喰ふる 負 解きけり
 驟るたれ 不次島と作らむ
 あり形 萱の 留六反
 う神けけふ燃ゆる雲霞あふと
 真置乃つるの福あふもむと
 ちうさるや突刺の糖のあふれ
 庄をのまのをよみそふらぬ
 捨しつらぬ新 長女のあつと
 晦日せきびく刀 賣つる年平
 雪乃 おまの園の公室あふま
 襦まゝの袴 片袖をとく

荷分 芭蕉 重五 杜国 野水 芭蕉 野水 荷分 重五 荷分 芭蕉

上ノ十三

むこ人と 荷を 担ふ 香を さん
 菘子の ひとふ 名を あら 禅
 三日月の 東へ 帰く 袴の 香
 蘇餅 くるくふ 琴う くの 者
 宣つる 奉けけり せとを 香を 教ふる
 まうよき 会に 義を 香を けり
 うけらる 香行 能けり 香 記 儀を
 ありひら けり あり 香 常 けり
 あり 香 けり あり 香 けり
 その 香 けり あり 香 けり

重五 杜国 芭蕉 野水 杜国 荷分 野水 重五 荷分

中ノ波 けり あり 火 焼 けり あり けり

炭賣のどろつとあそびあそび
 ひろの雅を 焼 磨 窓
 花蘇子 宵の雲は 咲く
 秋の月を 乃 月を 迎
 風吹の秋の 目録 酒の
 若 歳 川や 湖 麻 多代 なる 俊 彦
 賀 幾 川の 智 尊 あり 川の 下
 社 力の こと 布 橋 あり 川の 下
 う 三 六 こと ち ね 越 越 三 平
 捨 け ます こと ち ね 越 越 三 平
 火 とも ね 火 燈 ち ね 人 を 目 録

重五
 荷 子
 社 国
 野 水
 芭 蕉
 羽 笠
 荷 子
 重 五
 野 水
 社 国
 羽 笠
 芭 蕉

三十四

門 守りの 公 卿 公 卿 公 卿 公 卿
 血 刀 々 々 月 の 影 々 々
 雲 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 ふ ゆ なる 雲 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 なる 小 屋 楼 の 影 と ま へ なる
 僧 あり 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 白 鯨 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 宜 貴 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 八 十 年 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 西 南 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

重五
 荷 子
 社 国
 野 水
 芭 蕉
 羽 笠
 荷 子
 重 五
 野 水
 社 国
 羽 笠
 芭 蕉

賤の家より賢き女見せし
 物細小葉をばはみ 日たくれ
 とやうもて 花みこころ 正月
 つのみま 向うの 安き又の宮
 實の目代 目を雁居のま 起て
 雁居のま 雁居のま 雁居のま
 ひきしん 待し 雁居のま 人の縁
 雁居のま 雁居のま 雁居のま
 鴨きり 雁居のま 雁居のま
 竹夜の 雁居のま 雁居のま
 北のこころ 雁居のま 雁居のま
 雁居のま 雁居のま 雁居のま

重五 荷分 杜国 野水 芭蕉 羽笠 荷分 重五 野水 杜国

上十五

田家 equal 眺望

雲月如 鶴の 行きたる みのみ
 冬は 朝日の 向き 来る くるり
 櫻枝 山家の 体を 木の葉 時
 ひき くるり 雨の 泣き みる
 音も みる 具は 1月の くるり
 砂ころ 草 葉 切し みる
 村乃 ころ 葉の 山連 みる みる
 御 みる 富士 見ゆる 寺
 岸 みる 桂乃 花の みる みる
 茶 みる みる みる みる

荷分 芭蕉 重五 杜国 羽笠 野水 芭蕉 荷分 杜国 重五

経述の鳥帽子の女み三十
 存りし本多の化し了ぬの落衣
 ちりあふき山橋よきとて人
 麻うととりん 奇の集あひ
 江を近く物あ居て世を捨て
 糸目如く身はあぢらなる
 縁ともも竹ふ落花をちね
 花葉ゆつ流本丸の山嵐
 胃を足てげふ洞くくちう
 丸合けは裏をゆりく去あゆ
 泥のよふ尾を引髪を捨ぬ
 清筆よまふあのみくま

野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五
 荷分 野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五
 杜国 重五

下ふてゝ年外小角豆の敷のり
 菅やまきふふ炭恋つく白
 芥子あまの小坊受ふあむ
 おくをすのみまてく蓮の実
 志門くさふ鶴巻のそく月の糸
 露おくまらぬ風やうわさ
 釣拵よ尾根あつてくは尻
 豆腐つくるそ 舟の棗に
 元改の草紙杖も破ぬへ
 伏見本宿の控たまをころ
 いろふよき男猫ひらを捨ぬ
 まけあつたのちうきとよふ

野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五
 野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五
 杜国 重五

雲のたもとを風が吹くまじりて
たふたふと人々もさかたけり
海田のふりかへりてさかたけり
乾坤のふりかへりてさかたけり
いかにかたけりてさかたけり

元禄と六月

哉智

誠人

上ノ十八

花見

木ののさふけりて繪も換りぬ
西日のとくかよき 天と云なり
旅人の風うきなり 雲もかたけり
こころもあらぬ 太刀の鞘
目侍とくぬき 肉衷の目石
穀肉つくる 拙くたをりて
穀もさかたけり 三つ来りて
名はさめくは障りたる 雨
入込り 飯沼の海湯の文まさ
中もさかたけり さいふ

公羽

珠 碩
曲 水
翁 碩
水 碩
翁 碩

りふのりき 峰 一方へ高しけり
むまのりき 峰 一方へ高しけり
ぬのりき 峰 一方へ高しけり
月 見る 瀬の 瀬のりき
我 向乃 船をさるる 波のりき
厚 印くくさや 向ふ 峯を
ふ 都の 嶺 花乃 盛るの 一方 田
巡 神記 ぬる 乃 けり けり
何 ようも 藤乃 瀬を ぬるる
文 虫のりきの カきん かのき
帯 けり 日さしと たる ぬるる
瀬 峯 みる けり 位の けり

碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁

上十九

よ 東乃 紀の 園守 穂 けり
酒 けり けり ぬるる ぬるる
双 六の 目録 のりき ぬるる
坂 の 持 佐 けり ぬるる
中 けり ぬるる ぬるる ぬるる
家 名 乃 甲乃 なるる ぬるる
順 手 ぬるる ぬるる ぬるる
月 ぬるる ぬるる ぬるる
花 ぬるる ぬるる ぬるる
時 四 方 なるる 草 乃 なるる
一 費 乃 然 けり ぬるる
医 者 の けり ぬるる ぬるる

碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁

花咲けり芳野のつらさを過り
花けりさくねりさきの山

水 碩

あつきの名もあつみやまは草

珠 碩

うきを懐乃さるるさるる

扇 路 通

ゆきをふらふら 研 越 たり

全 碩 全

秋のま宮ものまをせむひけり

全 通

あつきの名もあつみやまは草

全 碩

上ノ比

移り番れ羽織と肩糸引巻を
小女うきうき 市北うきうき
鮫 為北うきうき 川の傍
いふ御中々 あつひ うきうき
こころうきうき 弟もあつみやまは草
はつきの甲乃 大外あつみやま
はつきの甲乃 大外あつみやま
花平あつみやま 月ハあつみやま
あつみやま 椽のりあつみやま
生廻あつみやま 傭乃 あつみやま
此村の 廣きあつみやま 医者あつみやま
あつみやま あつみやま あつみやま

碩 全 通 全 碩 全 通 全 碩 全 越 人

うらむらむの世を返戻りせむとて
牛の道 包き酒のさもま
たうらやう 村此方そくひらき
笠着ま 真白く 心の洞中
うらむらむの里乃ちまの月の影
まのりく のりふのこま 探む
免のらーやまの亭心とてまき
文珠の習直も 梨木持の悪風
たうらか 城又とて 山はねひ不傳
にむも せぬの 落る 海 桐
志の山乃ちうらむらむの山ひび
おまふらう 積を 見ぬおらう

人 分 人 分 人 分 人 分 人 分 人 分

上ノ廿一

汗の流るるをうらむらむの山ひび
あまらふ 雨そくうらむらむの山ひび
花さうら 又百人の 探む
まらう 旗も ありさう 旗

人 分 全 分 全

城下

鉄砲のまらうに 昂る 灯自れ
神の小まの 癒さく たらく
西風よ まま 小貝 拾ひて
なぬらう 一り 棚 ひく 旗さう
甚れさう 二人 ありける 智何
秋の おま 物さう 人の まま

野徑

里 東 泥 士 乙 州 怒 誰 珍 碩

女席花は細けのむをそと終く
 目の中おのりく見をきうちかふる
 今う目もまき川糸物をもう愛
 ね乃おろしきけりまいつきさう
 了ふ名神を履をういやくて
 一里 あれう 乙東 小野
 見知く是ておまふはも常を
 そと世々洞つ雨や 考くれと
 雪舟小常越の程女の宿きうか
 きて寄よけさく丁百乃茂
 月ら保庄屋をよめてさあふせ
 貴深の 塩乃うき早蕨

華 野 里 泥 乙 怒 里 野 乙 野 珠 怒 里 野 乙 野 珠 怒
 野 東 士 州 誰 東 徑 州 誰 東 徑 州 誰 東 徑 州 誰

上ノ北二

赤くまきくけりも都さうを
 中を遠の坊を 遠の
 のま行居酒の荒の 一
 古きまきくけりも都さうを
 時く六百姓もも島側を
 配所を見ぬ 借御乃拾
 めそらまきくけりも都さうを
 連も力も 皆を改か
 くる風の大聖寺徳を改か
 貴のおろし用 けく 乙東
 粉割きおろしけりも都さうを
 夕辺の月も 皆を改か

里 珠 野 怒 里 野 乙 野 珠 怒
 東 碩 徑 誰 東 徑 州 誰 東 徑 州 誰

宿禰の嶽よりまきうくはるる
四十八老乃うらうらき
髪とせふ枕の端を麻直して
解を御目へあけを吹く
杉村のむらさき葉は雨はつき
田の注隅へ苗うらうさ

里東
珍碩
乙州
野徑
怒誰
泥士

雑

龜乃甲あふはつ八時も
峰は葉を風かふく
百姓乃木解まき入るの
小寄るるゆらうまの種

乙州

珍碩
里東
探志

上九三

獨居く奥のうらうき籠の月
燭輝落てまゆる
我我の御前よちき坊う亮
風呂の加減の志川うけけり
掌の空きあまを吹か
雪乃やうらうらこの塵
初はむら解乃美形居る
公の子あまをそわけり
此は塵の香よ吹そこの糸の
つねをふ起てまけはる
鈴入の中をさけて月よけ
牛うらうらも奥ゆるやま

昌房
正秀
及有
野徑
二嘯
乙州
珍碩
里東
探志
昌房
正秀
及有

茶盞ふ盛るる雨の町あふ今年
宵をきけぬ心竟乃ちちく先ま
うと早う目ととんみらとあか
体いひのふふあ乃 出うねる
深きうきは縁給のねきみ三
撰ちまさまて寄きわけの
眠るふふ茶膳乃しをきけ付
傳るま 傳る 赤まきうの
りまうふる 録一筋小 棟箱
あ及うゆ 難 棚 乃 行
さくくと切縁のふふ風吹く
茶加の序ふもふのうなる月

野徑 二嘯 乙州 珠碩 里東 探志 昌房 正秀 及有 野徑 二嘯 乙州

上ノ廿四

喰物に味のつくと焼けけ
燻拵るふ次小居 器あ
目をぬくま虎のうそまうゆ
あひのふくたに 室 上 侍
ふまうふふ 松ねあて 橋あき
籠を築る 寺 上 茨
苑の頂 登の目 結ふ 蓋を
さうふふ ねふ 獅子のまら

珍碩 里東 探志 昌房 正秀 及有 野徑 二嘯

田野

野乃や 苗代 晴乃 角之 所
明るくす心 野嵐 ね顔

正秀 珍碩

けずあとのりやふゆりまのち
 うまふあうき門口の文字
 月形より利休の字を自筆の
 度く字にふりかへりたり
 虫いびきつらきことゆゑらん
 字をく乃本辰月形に
 筆を文を百りあそむるあか
 かのこころけり供乃侍
 腹平ハまき物不自由なるあか
 瓶の徳も弓のるふき
 月形より師長の字の銀治
 手紙より長きる様子をまゐ

全 秀 全 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 全 秀 全

上ノ六五

いふぬこそ大根揃もあつれて
 獨あつてもも難難お智けり
 江戸酒を飲候へるいふ事なり
 水の心弾まよ乃入道
 雲雀啼甲入原真まき酒
 火を吹くも居る御門の祖父
 本堂六まき世光登のちりら祖
 宿後の夜あつりよまひぬ
 笛を痛人の海を給ふあそ
 落し香まきまきした瘦く
 最頃の空より感候を授あそ
 口と黒ぬりよまきの何屋

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 全 秀 碩 秀

ふふふけふの別々なる草袴
花入初、犯後の隈本
我目路も管々月々る後無細
寸布よひひらう夜雪をかうらう
沢山いー元あくと吃られて
唯あうけくも猫下輝ふは
る親のいよ人町の雨あうり
あふの楓木の寄萌々
菘花の雪雪抱つるまゆそ
北野のうら場ふゆゆふふ

柿喰三吟

ハ、新や脚の藤原まき枝喰ひ

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

上ノ六六

あふふりつむ葉木のり
はくま中静ふまきく動き出
松の月夜々抱くははあり
唯のよとんとも 春くくひ
鹿鹿く人の秋をまろく
梓陰るの残残少すうらむ
空の事あ紙をまきりーけり
入出の屋ふ改病りてあふん
ーはくまはくまをうら海さうま
ちのくうくあふ内法る様あふ
まきまはくまをまきまぬ抱笑
梅の花かりをくく世の中々

北枝 救童 州枝 童枝 州童 枝童 州童 枝童 州童 枝童

のほおくとて 渡乃 吾舟
 舟の雲々富の... 能く...
 武形... 渡川 菊小川
 月... 舟... 能く...
 酒... 舟... 塔 州
 舟 降... 舟... 舟...
 名... の 二階... 舟...
 舟... の 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...

枝州童 枝州童 枝州童 枝州童 枝州童

上ノ七七

舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...
 舟... 舟... 舟...

枝州童 枝州童 枝州童 枝州童 枝州童

猿蓑

晋其角序

洲渚乃佳つゝ分夏古本かまうて此世かきて
紀前より時を待たぬ御は身すゝせその匂小瀬の
入まれば山見ふに似たりくく世のさあつ
長く女あつてつて木葉の葉をあらへむ入徳ハ
ゆふよ及つればをあらへる酒をあらへるは
西行と女の骨をて人を作らんとて群のさき
中をぬかすふかえんけつとやとれらる人かた

竹をたぎらむのころなむいふ女物のほのちりとも
 けりあふれんはたふら入るハアキマツクむた
 のふらん今時をいひて一は湘濤は魂の入らん
 中身よと然る有行所のころは如文然とて山中
 もて懐きしハ甚良は尊を那活弁神を公のい
 けはいふらつら新陽のおもひゆひけんはたに
 懼るま初術よりあれをこゝして世を憂へば
 だて懐きとのハ名はすくかへる戸と清きよのびも
 一は遠き合をそまふれ北のりけめん入まをいふ

冬

初〜くは猿も小はきをりけ
 にはさつけく河をある秋の降の雪
 河をまきや雪のゆくはる 鮎ふね
 幾人うきくまうけぬく勢田の橋
 鏡持の 猶ありしころとくんか
 度 びやひより 晴雨を 涙を
 糸くすくめをそまふ 河をいれ
 仔細の 境ふ入りて
 ちろりやまをらけは 橋の一河を
 晴雨をいふ 思ふつふ心の 実なり

芭蕉 其角 千那 僧文 正秀 史邦 尚白 曾良 凡地

ちりくして竹田乃里やひきく
ふまきくれり田乃里やひきく
新田より禪設燈くくく
のそりや沖は河ぬの真悦は既
ちりおたり行や地本の早は
つろも新くくくくく

大津 乙州
羽江 昌店
本采 百歳
野水

たの糸綱ふはとたきくそ糸の申
降いたとまきくもあきん 遊地
禪寺の雲の霧もあや神を月
百古きりの兵る申中氏花十月
あきくや敷腫痛む人乃我

其角 全
凡北 嵐紫
芭蕉

上ノ三十

砂よけや寝雲のくくくの空は立

凡北

かきくも

梓の麻のくくくく梓命く申

玉芳

横竹をならわて通る 十次く

越人

ちやの巻やわくくくくくく

越人

このむくの文書のたけふ折とる

凡北

古寺のくくくくくくくく

凡北

いぬの巻田ふん家巻をひめて

新あいのゆきくくくくくく

其角

大の雲を牡丹のそふのきり 傑

車来

草下

時自のくくくくくくく

尚白

神速多むらりりる法 於 珠碩

霜月朔日

獲手うらうらふり物あり 衣 袖
 あり月のあまを移りや 衣 仙 靴
 今ハ世をこのむけりや 衣 衣 袴
 尾形のおうりや 衣 海 袴
 一 類く 衣 袴 袴 袴
 茶湯くつりや 衣 袴 袴
 炭室ふも 袴の袴の袴
 衣の衣 袴りや 衣 袴
 無きや 袴り 袴り 袴り

良品 且 去 振 尚 魚 凡 芭 其
 品 菓 来 丸 白 鱈 北 蕉 角

上ノ三十一

口 景のの家もの 衣 袴
 衣 袴 や 袴の袴の袴
 袴の袴 袴の袴の袴

貧乏

ま 袴の袴の袴の袴
 袴の袴 袴の袴の袴
 袴の袴 袴の袴の袴
 袴の袴 袴の袴の袴
 袴の袴 袴の袴の袴
 袴の袴 袴の袴の袴
 袴の袴 袴の袴の袴

凡 北 芭 其
 靴 袴 袴 袴
 袴 袴 袴 袴
 袴 袴 袴 袴
 袴 袴 袴 袴
 袴 袴 袴 袴
 袴 袴 袴 袴

るる底を見てはるる底の形
鳥の行りも入てるる底の
みりては成らぬ底の
襦袢の底の形入てるる底の
まの底の形や襦袢の形
くまの形の底の形や襦袢の
見ゆるさえ襦袢の形
首の形や襦袢の形
魚のうけ襦袢の形

文神 路通 旦葉 杉風 真角 春年 竹戸 曾良 探丸

上ノ三十一

あつらふをねばりも思ひ細代

沙白砂小陰原

膝つきの小うらまの形
襦袢の形や襦袢の形
鶴の形や襦袢の形
あつらふをねばりも思ひ細代
まの底の形や襦袢の形
初雪にあらぬ形の
あつらふの形や襦袢の形
くまの形の底の形や襦袢の形
下衣の形や襦袢の形

文 卍 史 邦 未 登 元 非 西 好 其 角 史 邦 羽 而 探 丸 元 兆

かろくと川一筋や ちのちとら 全

信濃路をさるる

ちのちとら 枝の茂る川路 芭蕉

草菴の扇をぬき

善光の山麓もいけぞ菴の香 其角

ちのちとら 竹のよき木をさるる 羽笠

はくとも 健あふ ちのちとら 旗 丹七

ひろくけて ちのちとら ちのちとら 去来

青無返棹

乳のよき木世にさるる 尚白

ちのちとら ちのちとら 無の木の内 芭蕉

鈴くに 鳴る ちのちとら 似ぬもの 乙州

上三十三

一月の 秋のちのちとら 文州

住吉奉納

あけ 柳の葉や 鳥の息を 其角

常の葉は 竹のよき木をさるる 順琢

家くちや ちのちとら ちのちとら 排 祐甫

乙州の 柳をさるる

くちの家をさるる 芭蕉

弱法師 我門のよき木をさるる 其角

茶の木の葉や ちのちとら ちのちとら 長和

ちのちとら ちのちとら ちのちとら 去来

大とちや ちのちとら ちのちとら 羽紅

やうく且そふやさしうる年た等
いねくこくみいらまら年た等
年の象成とてうまの成と

其角
路通
杉風

夏

有明の面をりやわくき及
多うううう岸より夕や岡鳥
此を携よるりひけよほき
やうきひけやうきうてはる
時ちやもまき群の門ン様
ひるまてふまのしそる時ち
蜀魂がや本のはれ角造

其角
木華
尚白
九北
皆月
史邦

入相けひくまの中やわくき及
わくきを成ようくのころり
おすき代 宿屋や なくき
まぬぬれ我塚てやけけくま
本時一目の時ちもじうや角の象と
うちけ
本時や 露ふ身ぬれや
うきをささいくせまうんも
宿館庭甘まぐ家葉は目
岩 楓葉いさるる 一さうり
四ノハ口清意無葉
花ありうくくさるる

羽紅
丈艸
去来
奥羽
曾良
芭蕉
曲水
其角

累りくもぬいばむお母り染るぬ

全奉

お備

ちんちんこのかきききよけーのた
おまゝのいゝ人ありあきけーのた

越人
珍碩

いふ命きけーの一まや便る空

青くまいたもひもけーけーのた

村園

井のすゑりし深く清くは若

半残

起つておたにすまねわのち

起つてのむらうすうまつら

小井

題すまゝ漢城落梅舎

夏極る如くもあきも名西が

元北

三十五

破酒やうまくと麻の子の通ひぬ

曾良

南の旅店

泣のそくなくれぬる園の桐

千那

洗済やまぬふりあふ柿の花

薄芝

豊國みく

竹枝子の力を許まぬふへま

九兆

あけの子や留勝の悪太常

去来

おけのつや枝きぬれ梅のすまひ

芭蕉

枝を吹くまきくさるりーのた

正秀

明石夜泊

樽壺やまろかきまをる月

芭蕉

雲々代やい塊麻のあき

越人

五月三日の事

其角

高橋の

芭蕉

家

岩翁

環

尚白

大

蟬今

大

今

五

芭蕉

遠

全

此

全

此

全

上ノ三十六

五月三日の事

九兆
永節
史邦

此

史邦

此

史邦

此

史邦

此

史邦

此

史邦

此

史邦

此

史邦

此

史邦

此

史邦

つらきもまたあゝ切やまゝの雨
去來
髪削や一夜の余情を月面
凡兆
月のきらや 故き傾く さつとあぢあ
芭蕉
縫物やあしせせよふみろふし雨
羽紅

七十人命の老聖のいみじきうけのふゆふせ
さ無うしてあゝいも 子不しののむせける
その老聖のまきうり一時のさか見あわ
人あひひきうけはと長もあぢあぢあ
古年やまねるる年ふもとこりこも
あつとらうけは
其角
六足も力落しや又月あは
去來
百折もまふとらうけはと長もあぢあぢあ

上三十七

あつとらうけは 茶のうけの文婦これ
正秀
けしき合子とものさやまの鳥
游力
孫を巻く
まき草の 家へてやん 雨煙
智月
まき草の 家へてやん 雨煙
花紅
あつとらうけの 園あつと
芭蕉
風流のさうらあまの田極舟
芭蕉
出羽の堂上まき草
全
石帯を面影うりて 紅粉の花
全
法隆寺の阿彌を佛の太子を深き
千邦
市橋のさうらあまの 紅粉の花
萬年
田の取けまき草の 園あつと

膳所曲水の撰めて

雪のやゆきくまひてゆきや

去来

勢田号見て

やの表や子いもほのやま

九非

あつる見や船頭研てあつる

芭蕉

三懸神人語り

雪のやまあまきりき八鬼尾岩

田上尼

あまのうらみ精とさう合ぬのあ

尚白

草ゆきや一而八中へあくたの良

半残

二瓶後

雪のやまきりきあまのく百八の良

何処

すく風や我ううせんかすまはた

乙扇

上三十八

鏡坂神を物うて

このやかりんよまの舟の良の巻

嵐蘭

鏡別

まきぬやねんよまの良の巻

里東

うきくまひてあつる

まきぬやねんよまの良の巻

あまのうらみ精とさう合ぬのあ

其角

あまのうらみ精とさう合ぬのあ

犬舛

あまのうらみ精とさう合ぬのあ

嵐雪

あまのうらみ精とさう合ぬのあ

深志

あまのうらみ精とさう合ぬのあ

芭蕉

あまのうらみ精とさう合ぬのあ

伊福市

淡うらけと暮の影に
海門の妻に留りて
白雨を待つす
史邦 千那

李山堂之蓮花也

命雨や蓮一枚の
日鏡田や晴くつ
日の影をさ盛乃
あねんらの教
父うらふら
巖 乙州 九北 正秀 木節 野童 羽紅

上三九

昔年八湯入るる
千あつたま
巴山

よき人の少神も
あふくやわらわ
あふくくふ
ま〜〜さ
辰ふ甲
月斜や
夕ふま

よき人の少神も今や
あふくくやわらわ
あふくくふ
ま〜〜さ
辰ふ甲
月斜や
夕ふま
平之野 今
大坂之道
世蕉 嵐紫 宗次 九北 千那 曾良 去来

特 狂風や運夜ちうくふたてり

此の狂風より狂風ゆめ

くくくくねけ初き葉の風
芭蕉あふむるなを野の風
人平ゆき狂風もよき狂風

加賀の金鳥寺に宿り

修寂狂風まきや表ののこ
芦原や雪の麻衣を狂風
あきさ病や鬱金白鳥の狂風
まら病や狂乃の狂風の狂風
大比叡やまふ野原のまら

不知 讀

杉風 路通 珍碩

曾良

山川

凡兆 去來 野童

上四十一

一葉ちうてゆぐれはや柳の苗
文月や六日の常はあまの似
合歡の木の葉もよき狂風の狂
七うりやあまのうりまらまへへ
まらあまの狂風りけり相撲を
狂風は病を狂風する狂風
狂風やあまの狂風のあまの狂
笑あまの狂風もあまの狂風
あまの狂風あまの狂風
あまの狂風あまの狂風
あまの狂風あまの狂風
あまの狂風あまの狂風

凡兆 芭蕉 全 杜若 去來 風麥 及肩 嵐雲 杉風 千那 史邦 且葉

世風をよそも思入らうとて
 子尹
 選の子の親のころやすむる家
 羽紅
 の歌あつたふれ家とて業らうの文を
 けり序せに

子ねきく一揚の先の序のみ
 九兆
 序くしうろくけりふゆいふふとて
 灯を不別て

君のまじりまじりかたつて一花序の
 去来
 草のよそれか歌のよそあり高
 李由
 え縁二年の縁か何ぞいふとて
 よう二趣かふりかたつて一花序の
 かの用をいふろくけりふゆいふふとて

先達序のりて

のりくあつたつて序のりて
 曾良
 相かまねらうとて序のりて
 芭蕉
 百舌をさるくや入目一途文を
 九兆
 初序ふり宛とつてかまねらうとて
 落梧
 望月ゆき

病序のりて序のりて序のりて
 芭蕉
 海士のるくゆ海をさるくや入目
 今

かたのゆきとて序のりて序のりて
 芭蕉
 や物とて序のりて序のりて
 芭蕉
 序のりて序のりて序のりて
 芭蕉
 まのりて序のりて序のりて
 芭蕉

むきんやま甲は下乃きりく
茶中やさき乃中氏中の
たさあや勢た見て何れ六月

芭蕉
尚
風

のせふまうてけう句

葉月や交橋よつこころ人
三と月余器のゆきおせりく
雲裡く月お夜なりぬら月
月見をん伏見乃城の将郎

文
千子
之道
半残
去来

公朝を昔言ふ宿りて

おりのふ 松のさのえよは月夜

士芳

加茂小僧 春ふ渡ののりく
つるんよしーしや

上ノ四十二

月影を指まゆりく 膝乃上

史邦

左邊の云像よりこころの
影やうーこころは月夜

卓袋

をせぬ葉やわ久一め月の影

乙筋

東照宗家去年の月くは傍事

丈艸

吹風乃おせや市ふ月ひら

九兆

あつう結てあまひあつうぬ月の雨

尚白

向乃能き宿り月かき勢うれ

曾良

元禄二年つうの屋ふ月をんて

此の咽は法経上人の古刹を築

月清一社行かゆり砂のこ

芭蕉

仲村の巾箱のをて送軒し

つるまの月もふなけり御も愛
 明月やまの寺の雲のたふら
 月見ま六人の結ふいそへ
 信山のいもの山の山取のまねい
 初瀬や海門の信共飛御衣
 一やや夜もやあつたまぬ
 神の極のる邊一ころをい
 波糟やういもいふまは
 一のまうてまううあてい
 一鳥不鳴山更遊

去來 葉
 冒房 羽紅 尚白 九兆 去來 越人 止秀 嵐紫
 九兆 曾良

上十四三

龍まうの麻のつき合所の下
 熊あくや波持る乃其高ま角
 上行と下くもや飛乃天
 驚給ひも何し一 頼つ
 あり同のうまうきし角乃有
 菓を切つたまらふもなるりり
 了すまに懸の鳥目や雪ちまれ
 きの比のあつらふ 外指のた
 後ろく母や 世途るあゆ
 自題 彦持舎

千里 珍碩 九兆 半残 尚白 其角 珍碩 士芳 九兆 去來 塵生

肌寒し竹切山のうけ紅葉 九兆

神田素

されしとひさの梅の影の

神田素の歌うら

梅の影のうら

花ききき大人を流さすつり

行れ乃四の目弱きまきま

まきま行れ乃乃の風

世の中八羽鳥の毛のひま

梅奥の古山ふさむくの梅の影

春

梅咲く人の怒り悔もつ

九兆

嵐雪

文卿

九兆

全

荷

露

十四

上梅の影ふまじりけり候

梅く香や山路梅入る人の早

む先く香やふさむ甲六斗

庭奥

梅く香や砂利き流るる

とめ梅や宵るききあゆ梅の花

むめ梅や酒のうらひの

むめ梅や酒のうらひの

多き梅の影ふまじり

ゆき梅の影ふまじり

梅の影ふまじり

梅の影ふまじり

去來

土芳

半残

蟬

其角

芭蕉

千那

九兆

日當りの春候あつちや 層々存 格不 支函

晴香は動月黄昏

入相乃梅りなりあひひきさる 風麥

武江のわびく旅亭の猫ま

藤くさき空の細月や 園の物 乙州

幸未のこゝはきりあつちの

山よ月よを梅の影ひきさるなり

けは六四の嵐空の目あつちのたや

自ひを空の内者といふは日比あは

るはやふかひはれをねふまは

感動身のみきさる候かきさる

ふれいその夜のまふひくまを

暇さけしきさる人りまの風程を
つまねれさるや

あまらて又一自ひ宵は 廢 嵐蒙

百八のう極て迷ひや 園のむえ 其角

ひくさるも能宿も人初み日 去来

舟自也 厚遠のけく 梅より菜 史邦

えらややさふ酒茶も名茶茶 嵐蒙

霞は月 西ふなるまの園ゆえ 如行

懐翁の春中

裾折てさるそのまきん草 枕 嵐雪

つまきさる 踏付くたさる茶 路通

七種や 踏りくさるを 其角

我よりと懸乃ちけり一極丹が
 うすいやううふいひる竹の花
 概と六堂乃くさふ月水
 漆にたぬよとなれい極と
 考の考踏流に酒極う事
 うすいよやとや一登の考うう不
 考や考函なうり礼久一
 考や下訪乃遠かつく小田の玉
 うすいやや考う考をすえなう
 考の考や考きとるう八ととと考
 け極六極乃持金き斬うれ
 酒越しふらうてと考の極う考

文 其 全 去 一 溪 其 元 魚 探 卜 遠
 其 角 全 来 相 石 角 兆 口 丸 毛 水

上四十六

うすい河極雲なき 軒うれ
 考柳乃きんや籠の 竹所
 考けや極うに極のさ
 待中の正月もとやうう月
 田家小の考

尚 一 木 揚
 白 嘆 白 水
 芭 越 去
 蕉 人 来
 龜 尚 龜
 翁 白 翁

四くろや初あつらふふのあらん
 骨は木のくまをかくも木の葉
 白魚や海ひきつらぬのよみ
 人のまゝをいきては海や樓師を
 ままめたてたけりうつり
 陽やを丸つまうねる雪は上
 うけそのやちりあふまねの
 うけろのやちりあふまねの
 のとよみのいよあふまねの
 野やふあふまねの
 こけろのやちりあふまねの
 のとよみのいよあふまねの

嵐雪
 凡北
 其角
 杉峯
 元志
 荷子
 百歳
 土芳
 氷園
 凡北
 芭蕉
 配力
 六四七

狗脊の塵りあつらふふのあらん
 杖客まゝをいきては海や樓師を
 こけろのやちりあふまねの
 のとよみのいよあふまねの
 野やふあふまねの
 こけろのやちりあふまねの
 のとよみのいよあふまねの
 まゝめたてたけりうつり
 まゝめたてたけりうつり
 まゝめたてたけりうつり
 まゝめたてたけりうつり

嵐雪
 路通
 野水
 凡北
 澤雞
 嵐虎
 猿雖
 芭蕉
 史邦
 羽紅
 史邦

峰とまゝの事案の行や去の巻
 極と牽やレ印ふかきとるままの籠
 ともれいふふくまの籠のたみん
 桃却くらくらうや女のよ
 ののた境ちまふぬくまなれ
 甲人の勝あしうの田深うれ
 據のまて一衣きほけり
 空や切を白柳の嶽と行く来
 ののうとくゆいさしや
 日乃れれやともこの上乃親
 兵の舞ふまのうめや
 園のあやまをまをりて
 昌房 去來 菽子 羽紅 鳥巢 嵐椎 半殿 桃妖 圓風 珠碩 土若 芭蕉

上ノ四六

越より越傳へ行くと密のまりの
 わやうまともくはさるる心ぬ
 さまよひ
 夢の原の棒の枯枝不月八入ぬ
 年々より見とるまのうめ
 子や積人胸の重客のまのう
 ひさくなく仲丹柳のまのう
 世はまのあまのう
 草草少儀洗しつとやま
 本山あはれて尺くせらるぬ
 畫續
 心吹やう後の嬉好の有上時
 芭蕉
 九兆 石口 杉風 芭蕉
 山曲水 山店 芭蕉

白心の上はふきつらく 枝のれ 車来

ころころとくさくさのちまきけれは
船あけつらん物ひらりとけま

さまをうて

井もろく昔やらり 枝 書羽紅

晴年あきせささつ づきさうれ 坂上虎

うらひすの笠おきくろ 枝のれ 芭蕉

そのささくまき 進みまきけれ 利雪

東風少あま

心坊さやまふくれとさめろ 其角

一枝ハ折下ぬりあーハ 尚白

勢のたもきいふをまきく 凡兆

上四十九

直先不卑 枝のれん ちさきさ 文州

有明のたつくあまくまきさく 史邦

常きふおろまけけ 花の身 千那

首戴のあまをささ

指身さく 花は相ひ 神乃白 芭蕉

いろのふたねの庄のそめく南の

ふまきくふの料は情まけりこと伝

えんるれハ

一甲ふくれた守のみ味うな 全

七父の墓をさかきけり 一葉を

別は廿年のほろの地よあま

墓の上は櫻抽きあけりうねく

母の物うまうとてその様をうね
 寝けりよしの墓程様候もれはた
 まうらや花の山崎乃 けき
 初より子にわたりとを見えぬ
 ある傍の雲のくたは都くね
 片への名をそ
 嵐ともまよ乃疾ら且を花鞍
 腰きこれ宛中此ゆの之が
 えあもあつらうやうのふゆいそ
 大峰やよりの矢の 花の采
 乃 漢少のりや
 乃 漢や 乃 漢の代と 漢名
 嵐 采
 上ノ五ノ

園風
去来
凡非

半残
長眉

曾良

嵐采

流氏の繪を因き
 桐子の花ちる花の 主まうと
 庚午の采はを焼て
 焼るけりされもむらりまはし
 ちあちるや 伽藍乃 樞藻乃
 海棠のすまふ湯乃 赤の月
 大和行御の付
 草花とく 宿るはや 最の花
 山鳥や 郷端より 尾のひら
 やまつ 海ふんや 文り
 名角して 打たつて 足ま
 學のあまき ともまう 山崎乃
 羽紅
 北枝
 凡非
 普船
 芭蕉
 探九
 智月
 山川
 式之

羽紅

北枝

凡非

芭蕉

探九

智月

山川

式之

本家塚

千五百九十九年八月廿一日
本家の初詣の世帯

皇御水精

のまををいの人とあしける

おきの羽も刷ぬたのしと

一あき風乃本の家あつた

腹心の物もあつた川あつた

たぬきをあつた川あつた

まのく戸あつた遠くあつた

人あつた名物の利本

去來

芭蕉

曾良

乙及

芭蕉

史邦

史邦

史邦

史邦

上ノ亭一

ラ

おきの羽も刷ぬたのしと

一あき風乃本の家あつた

腹心の物もあつた川あつた

たぬきをあつた川あつた

まのく戸あつた遠くあつた

人あつた名物の利本

おきの羽も刷ぬたのしと

一あき風乃本の家あつた

腹心の物もあつた川あつた

たぬきをあつた川あつた

まのく戸あつた遠くあつた

人あつた名物の利本

邦北來 蕉北邦 蕉北來 邦北蕉 蕉北來 邦北蕉 蕉北來

いちとまひり二田の物も言を在
 るるけの言もいふ乃小の言
 火とりの言もいふ乃言の言
 かねとりの言もいふ乃言の言
 瘦骨の言もいふ乃言の言
 勝をくくく車引あむ
 くさく人根根設てうくくえ
 いまやうくくこの刀きー玉ま
 せりけ小掃てはさうまひりー
 おひの切るるみるるひ見よ
 青天小言明月の物もいふけ
 ぬあのかれ比るるの初を相

蕉 来 邦 北 来 蕉 北 邦 蕉 来 邦 北

上五十二

は本のやや蒸まぬきまて身感よむ
 ぬのこ言もいふ 風乃 又くく
 押合やや掃てハ又さうり 枕
 くららの言もいふさあきを
 一様斬つくる 空乃 ち取
 枇杷を 古言あよは言のえあ

邦 北 来 蕉 北 邦

市中の物もいふ乃言の言
 ぬのこ言もいふ 門く の言も
 二番言もいふ乃言の言
 灰うちくくくく 一枚
 け言の言もいふ乃言の言

凡 北
 芭 蕉
 去 来
 蕉 北

たぐさひやうーいふそき 船が
岸に打ち度あつる夕まうそ
藤の芽とらふ行船ゆりけを
乃公のおとらひ花のつむひ時
能登の七尾の冬に信らき
魚の骨あつるまの歌をわて
待入へー小川門の猛
まらんと屏風を倒れ女子あ
湯後い存れいまも侘ーま
苗香の雲を吹流る文流
傍やさむく身に久らう
さう川の橋と世を語る村月

蕉北來蕉北來蕉北來蕉北來

上、五三

草ふ一夜の地まをうらり
みよふ十生木つける 備
星は雲のよまにまむとの乃
遊とく早ま 川下の刀持
てのちうあふあありーう
戸勝子もむらうこの夢をま
てんよらうまのつららあつ
まきくと草子登しつる月夜に
登さあーひや 起ー初れ
そのまうふあうの落る井落
ゆらそせ雲のあらぬ半 概
草登る智と居てんちやう

蕉北來蕉北來蕉北來蕉北來

いのち膝しき 櫻葉のまゝ
さかしの品うらうらむる恋きし
浮世乃 雲ら 昏 小町なり
たふれぬを 薔まきうらも 涙と
川 岸うらわなれに 度き 板敷
まのひらふ風 遠く なるたのふ
うすうすあふぬ 昼の ぼやこ

来 兆 来 兆 来 兆

灰け 桶乃 末や けりまきり
わらうらうらとて 宵は ぼやこ
新 雪 一しき かりしる 月うけ
たぐて 膝 一 十乃 さうら

九兆
芭蕉 野水 去来

上五十四

夕け 経入 きののせ 籠く 子白
常の まるふく ぼやこ 宵 階 敷
さあ 半を 膝 一 ぼやこ まきり
塵 那うらうら 振り 雲けり
ゆふめ ふうり まきと ぼやこ 風葉
怪の ぼやこ を うきとて 文海
あのおひけり ぼやこ ぼやこ
途 世の まき ぼやこ の
金 澤と 人ふと まきと 舟の やま
あつ 風 葉 まきと の 宵の 月
町 内 の 舟も 文海 ぼやこ
何を ぼやこ ぼやこ まきと

蕉 兆 水 来 蕉 兆 水 来 蕉 兆 水 来 蕉 兆

花やちるる月ハ 西人多く夜をて
 なる乃 破 蓋のまきもくわ
 のころやふ山陰 けふ四十
 けききけ家のむねさうけ
 みるや兵 ちまは成るあふ風
 張の地きふ あり明一 おく
 ときや一き女のむねまきかて
 けちのひ草 根のたなく
 久月おまふ 菅ねのほろさる
 くもつさくれ ありとふのち
 うきつさふ自惚いれそけせん
 人もたふの靴をいふ おに

蕉北水来 蕉北水来 蕉北水来 蕉北水来

上ノ五十五

境より 田作まきやいせいそんまき
 加茂のやふまハよき 社なり
 物うりの 尾髪まきく名まきそ
 雨のむらりの 玄常 迅速
 ちよろく ちみは蘭のさうけい
 東さうら 股ららたのほ候おけり
 まハ三月 曙の せむら
 梅若くまきまうこの宿乃らまけ
 ちよろく せむら 曙
 ちよろく せむら 曙

北蕉水来 北蕉水来 北蕉水来

芭蕉

乙州 珍碩

奥羽の海は深き日よ西をありしを
りゆりて北海の花磯下きひすを破りし
と幸ぬありの故に標榜の海軍の流るる
るを其の第一の海軍のありしに
おのづから結成ししとすの初めなり
今山のやうにやうやくひやく
名残もまうとみつて一頃のありし
あつてしるる海軍のありしを
はくしめしるる海軍のありしを
南のありし身は深淵の底にありし
そのありし身は深淵の底にありし
おのづから結成ししとすの初めなり

を極くし幸ぬありの故に標榜の海軍の流るる
りゆりて北海の花磯下きひすを破りし
と幸ぬありの故に標榜の海軍の流るる
るを其の第一の海軍のありしに
おのづから結成ししとすの初めなり
今山のやうにやうやくひやく
名残もまうとみつて一頃のありし
あつてしるる海軍のありしを
はくしめしるる海軍のありしを
南のありし身は深淵の底にありし
そのありし身は深淵の底にありし
おのづから結成ししとすの初めなり

術の神をやうう老社に瘡より賢良文徳人の
 ひくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 捨てらぬ
 先づの心 推乃まもりのまま

凡右日記

時を北園中見せざる 獲るうね
 くのきくくの森ちうくくくくくくく
 鷲もくくくくくくくくくくくくく
 海山もくくくくくくくくくくくく
 ねちうくくくくくくくくくくくく
 細徑のやうくくくくくくくく

曲水 野水 去來 九北 午那 珍碩

昭宗

おのちのり 低性ふくけと送けり
 けりくくくくくくくくくくくくく
 雲をぬくくくくくくくくくくくく
 頼やまの 中めくくくくくくく
 ぬくくくくくくくくくくくくく
 みつたれ庵くくくくくくくく
 木はくくくくくくくくくくくく
 雲あちの 相くくくくくくくく
 月待や海を履目くくくくくく
 ちうくくくくくくくくくくくく
 涼くくくくくくくくくくくく

野徑 里東 乙所 怒羅 探志 元志 泥土 史部 正秀 支柳 如行

坊小の苗うさう

推乃よまをうへて啼き蟬の聲
目白のやよははよやう不侍侍

文せまき

膳所まや白子苗のくひまき

ま乃形せまき

袋くれやう羽田のまき

書音

一復入のふさくや旅ねすき

久まや持木の白鳥の一まき

早坂腰掛

社風や田上山乃くまき

雀

朴水
市隠

半残

之造

書

魯町
及肩

尚白

上ノ六十一

贈養

あつちあつちまきわらわのほろ

木原わく侍ふまきくちまきの記

色書に書

逢ふまきまきや教乃よま

指むたまき反佛乃よま

石山や行くて累せし秋の風

橋の輪やまきれて啼きまき

甲入今うまき時めつらま

啼やいしくまきまきのまき

越人

蓮の葉のまき小飛入庵ま

雀

北枝
木原

病

智月

羽紅

昌房

何所

越人

等哉

羽平治まゝの四番

春西やあぢも国原の山

月夏

涼きやけ菴まゝに終

嵐紫

曾良

續猿蓑

八九の空を西降る 都くね
春はくまの 白くす
初春のくまの 白くす
肉はくまの 白くす
きのくまの 白くす
物脊くまの 白くす
後橋くまの 白くす
孫くまの 白くす
根橋くまの 白くす
蝶をまゝのハチ

芭蕉

沾圃

馬寛

里圃

沾

蕉

里

蕉

沾

花のたを疎らぬまはれくくを
ぬくくらのわらうけらふのわ

里 覓

雀乃字也格あて候もまは
つたの岸おかりしと月
と空を穿てそのとハ柱を
あつくたふ秋のせく甘ほ
霜凍るるは寒まほ倍ふ交
越とまのそ外の 法 且
悔もくはけふの一宮の足ま
清状もんでまは公 ありけり

馬 覓

沽 園
里 園

沽 覓 里 沽 覓

上ノ六十四

よとたつとてまの天をまらじ
あまう ちとる ぬか 乃 審
何るのりなかくてあてに 約 逆
風ふとらるる 早物 の 掃 月
春新 秋の 住居 住くて
定殿の もとと 如 女 母 けり
明とらる 何勢の 幸 何の 年 掃
葉ハ あまの の けらぬ 一 徳
信 守も あまの て 守 まる 徳 磨
ま 輝 あり 守 の 徳 纏
学 の 乃 入 守 を 掃 纏
あまの 舎 身 て ぬく て 存

沽 覓 里 沽 覓 里 沽 覓 里 沽 覓 里

智恩院の誓りの端梅りて
 さりしはの後の 概さるる
 姐の態 不あをけりたり
 田利て 家ハよの誓りま
 状 書を渡向の 鬼神作らそ
 まさし 夫れあふね 母乃 親
 草の多あふくやのあの 此ち終
 何約と氣つふ 綿さりの 西
 うまき 諸ハ 賜しつは 宣渡り
 有 網 ころよ 明さるる 昔り
 は 本 院 の 花 の 中 へ 入 り け り け せ
 御 侍 門 を かくけり

上ノ六十六

里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟

百 姓 不 可 謂 也 昔 者 也 昔 者 也
 あまのめを 借るあふり 以 本
 後 物 の 借 紙 つまむる 一 座
 けよのあふさ けりり 借 紙 ね
 妙と這ふ 藤の中の 俗 線 の 交
 別をく けり 出 世 け け
 火 難 方 出 け け 借 紙 ね 借 紙 ね
 一 石 借 紙 一 座 の 借 紙
 ね 借 紙 一 座 自 の 起 る 天 地 ね
 借 紙 一 座 自 の 起 る 天 地 ね
 月 け け 借 紙 一 座 自 の 起 る 天 地 ね
 ありひのまふ 早 終 て 根 ね

里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟

よき時小原をやりて遊のこ
ま宮の元とちて仕る
花の何と遊のやうなま
ちのひけるる山原のこま
ふまふまふまふまふ
一雨ふりそわうふ風

里法老と法老

猿蓑よりのねる雲の松露
月八雲けきと静かちる
水くく池の中うらなうそ
篠竹まゝぬいそをいそく

沾圃
芭蕉
支考
惟然

上ノ六十七

新うあつとやうて暮れ月
通りのあふ不見世とらう
至志まひ一考てまはる
登麻の癖をるそく
舞うまてあつとまはる
申ふうの状の吉た左
朝日の目くそへや
一まお裁くまはる
ふきんふ青まの流の根
ふ年門あつとあつ
初あつと富の人のまはる
あ懐光る 續り小鑑

然考甚然考甚然考甚然考甚

見て通るに三井のたの味より
 其のちのいふいふとある日
 去る風は又西より北あり
 ころよふ時を大なりかゝる
 後海の肉多ハ今夜を安ん
 喧嘩のまじりてせしむる
 大甘のまじり二日ある暮時
 ちりまじりけし中時どろ造
 来る福のふ樹ハ皆物にあ
 栗の世をハ 近年お 作
 酒よりも青のやまを月とて
 未時迄を 産り 西面

然 考 甚 然 考 甚 然 考 甚 然 考 甚

上ノ六十八

定まぬ腹の心より志のち
 麻行のまじりておろこの要
 多の勢をばけりておろこの
 大工はつひの 園より まじり
 糸橋も けりよよまを降る
 かし身て市の 中必 押合ふ
 此らより 産生ハたのけもあて
 鴨の 神のまじりねけり ま

然 考 甚 然 考 甚 然 考 甚

今宵賦

野盤子 支考

今宵の六月十六日おれりあふの月を車の方
 乱れぬひて衣帯よぬまはれをいひさかて

富貴ある酒心よあまひて文若
 此言も酔のまはれはあまひて
 酒飲ふは酒のまはれはあまひて
 賭ふして降をうれけりまはれ
 人の心もかく窺ふまはれ
 くの目や舟中のたろの酒
 七さうに目を見ぬまはれ
 女中か
 見ると断おのふあまひて
 笑はれをわらうけあまひて
 赤土屋やはあまひて
 二乃の儀やまはれ
 公書中の出方ふまはれ

惟然 支考 沾德 猿 湯和 木節 子荷 卓袋

上七下二

田家

芍薬乃 名物よまへや
 咲くは花や 飯米又十石
 山門よ花ありく 水のあまひ
 なるは木の根やわらうけ
 花はまをまへて似合ひ人の泣
 きたるやうふ花はあまひ
 ぬり花はあまひのあまひ
 一目は花はあまひのあまひ
 八まはれはあまひのあまひ

若菜

無極や花あまひくおあまひ

李里 桃首 一 桐 如 其角 一 鷺 卓袋 沾圃 合 嵐雪

翁の啼や心 海の暮茶ハ
夕伎の船より 吹かすか
一うふ乃牡丹ハ 空きまを

梅附柳

春もやうきとこのふ月と梅
米さよまや大雲柳もひら乃花
守梅のあまの業あり 野老堂
里坊より 確まきや じ免のた
投入まや 梅のおく 落のた
病傷のなをたれ 梅のさうか
あつしきまを 空きまを 梅花
梅中や 梅の遠まて 小社の路

曲雲
孤屋
尾

芭蕉
其角
昌房
良品
万平
魚日

上ノ七十三

あふ梅やうきまを 家もあはり
梅の所や 梅は白ひまを せん

天神のやうふ 指て

若ふつけとわろや 梅は野
梅もくの 梅のありや 梅柳
時くはあふくちけり 川やあま
ちろるまを 教へちろるや 古柳
ま柳の ちろるれくれや 幽
輪をうけてる 空を 柳

雲 魚

雲ふまき刀かぐる 兼塵うら
うらふまや 柳の 坂城の 風あり

千川
大丹

遊糸
千那
意元
李由
九首
巴文

其角
史邦

雲のふもよりの体はさうしと
 うへひすや柳のさうさう枝のま
 成り蓋もひひいと紙のさうさ
 春の西や筆のつらまへ筆のさ
 ぬきさ同乃さやと山さう根
 ぶぬさ乃さうさ似合さ白根
 霞や田成たつら成さうさ
 鼻の中や力を細くしてさ魚
 雀のさや妙のさささ一 鱈の横
 鯛さうさ乃さうささのさ
 行鴨やさ風さつれさのさ

芳野西のり哉

智月 芭蕉 古味 西堂 今下 長虹 峯 峯巖 河野 河野 河野 河野

上ノ七十四

節乃子のむすきさ 霞のさ
 つれろふとさふちさ げく小給
 ちさ魚の 一ささうさ げくさ
 白魚乃さうさ げくさ げくさ
 海川乃さのさ
 さうさ魚をさうさ げくさ げくさ

まき草

土芳 圃水 子冊 山峰 其角 正秀 此筋 羽紅 猿 閣

味ひやきくくのたふよめりとき
 淡々うらまそふりのも思はれま
 怪よりあらひあれんまきんれ
 端まうく土曜の切目や喜喜塔
 あくふあま形小たうく去大根
 早蕨や心まうくふ乃 折うり
 みそ 妙屋のおむいし脚る二家
 日乃く新小指乃梳をき揚ほき
 蒲公 英やまうくふくぬ花さう

猫 登 附 柳 蜂

赤くおや月よか心味 猫乃云
 うきまうくふくくや 猫乃登塔

車来 荒雀 馬草 拙候 乃龍 正秀 夕可 一桐 圃落 椽九 支考

上七十五

おのひうねその里さる 鹿梅 己白

白日まつと

さまうても翅ハ初く 柳梅
 夜更さ乃くおや雲き 惟然
 舞乃く舞あつる 園指
 風吹子 舞のまゆる 出八
 登窟 てもたにせうき 雪空

春鹿

根おく 乃や廣州の 沢雉

春耕

妙 福乃 ちくろあてりさくろ 木管
 苗れや 心戀とて支の 此節

まろ酒や唐紙あつる其まろ酒 游刀

かまろーいまろ武江の旅店を尋けり

春酒や花ころおくまろ酒 支考

たる酒やまろ酒まろ酒 桃

淡く酒や酒まろ酒の空 凡

仍つてや酒乃居る石れ直 凡

没干

乃わり帆の淡く酒まろ酒 击

不川不富金の糸まろ酒 閑指

懸春

まろ酒やあられ初るまろ酒 許六

まろ酒やまろ酒越る酒の苗 風睡

上七十七

黒く酒乃本れまろ酒まろ酒 土芳

くけろ酒や酒まろ酒の柳まろ酒 砧力

小酒をた本れまろ酒まろ酒 万平

輝毎千酒酒や酒まろ酒の中 苔蘇

本の女方まろ酒まろ酒まろ酒 均水

まろ酒乃酒まろ酒の本の申れ小室まろ酒 正秀

三尺の酒まろ酒の目酒まろ酒 仙化

引まろ酒申れ酒まろ酒酒 支浪

三月尽

酒酒を酒酒酒酒の名酒酒酒 支考

集旦

酒酒のやまろ酒酒酒酒酒酒酒 武仙

少年

蓮乃ハ年乃ウモウのニ所ハ
 常ヤ雜者夫レ其ノ甲ウモウ
 蓮其ノカクフツル一標ノ負
 母方ノ致カスルヤ米モ所
 時より入レ衣當カテ願フモウハ
 子ノモウモウノ文ハ也哉レ侍レハ
 元日ヤ秋アキニ夜ノコト表
 人モ死ねモウモウモウモウモウ
 明ク飛入レハカクモウモウモウ
 標ノ世ハ瓜モウモウモウモウ
 糸織ノ左カクモウモウモウモウ
 常ノモウモウモウモウモウモウ

百歳
 尚白
 園着
 山蜂

千川
 芭蕉
 其角
 岚雪
 去来
 士芳

上ノ七十八

元日ヤ秋アキニ夜ノコト表
 人モ死ねモウモウモウモウモウ
 明ク飛入レハカクモウモウモウ
 標ノ世ハ瓜モウモウモウモウ
 糸織ノ左カクモウモウモウモウ
 常ノモウモウモウモウモウモウ
 又ハ年乃ウモウモウモウモウ
 蓮乃ハ年乃ウモウモウモウモウ
 常ヤ雜者夫レ其ノ甲ウモウモウ
 蓮其ノカクフツル一標ノ負
 母方ノ致カスルヤ米モ所
 時より入レ衣當カテ願フモウハ
 子ノモウモウノ文ハ也哉レ侍レハ

夙願
 猿雖
 葛屨
 非童
 耕雪
 左柳
 前川
 斜嶺
 山蜂
 任行
 竹戸

赤やとく川下に鏡もえあふ
 楊柳や鏡もやまらまきそのあひ
 雲りけしその日し柳より花ひき
 楊柳や日なすしあふまらふ
 浦よりやあゆゆり物人あふり
 志のさや後月のみまのさく不
 鏡月羽ろく存もあふあふ
 改のあひまあはむむ帰る
 湯あふもえんそあふのさき
 かけろくやら法海のものわ
 名まらふく柳のあふあふ

案の後の便あふ

且葉
 右圃
 圃角
 北枝
 譽風
 漢川
 貞喜
 春幾
 蕉下
 楚常
 挑葉

上ノ七十九

日すれぬや加葱後浦小鯛
 若いらくらあふや法し一五七
 既地盛るちぬくえん古あ
 まのあふ枝も神も法し一六
 七くまふあいてまらやあ
 多んれや芥生小糸のまらひ
 多りてあふのほろほく時
 くの芽のうらま干もあ
 ちのうらま人のあうけん
 ちあひてくあふ柳のまら
 柳やまらふ柳のあふ
 ふつうまらまらまらまら

牧笛
 李東
 須之
 和乎
 何處
 牧童
 不的
 和之
 女
 知月
 其角
 雨色

いさよの家の柳を柳のまきのを
あはれていつとぬき、木を花

秋之坊にん

破瓶
言落

通明の暮きくもくもく

牧童

まきや淋しきやうもゆ柳

漁川

もくもくもくもくもくもく

兩邑

もくもくもくもくもくもく

守白

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

一矢

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

孤舟

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

字路

毎のやうゆきゆきゆきゆき

流志

上ノ八十

夏之部

郭公

其角

暁の暈をささきやゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

大州

あつゆきやゆきゆきゆきゆき

考良

あつゆきやゆきゆきゆきゆき

支考

あつゆきやゆきゆきゆきゆき

如雪

あつゆきやゆきゆきゆきゆき

芦本

あつゆきやゆきゆきゆきゆき

あつゆきやゆきゆきゆきゆき

沾圃

木竹草花

物や 日ふちくろくろく 文は三
里くろく 次々くろくろく 文は中
園中二百

は仲乃 古木くろくろく 村の花
年切のさくも 村乃さくも
娘百合や 上よりさくろく 娘の茶
支考
尾乃
占園
宗多都
拙候

あく 香やうき ねははる 百合花
山ゆき 木のさくろく 村乃
冷けくろく 文はくろく 村乃
心ゆきくろく 文はくろく 村乃
文はくろく 文はくろく 村乃

上八十一

七五成庵のまゝ

春うらや 日くろくろく 文は盛
ふり 文はくろく 文はくろく 文はくろく
心ゆき 文はくろく 文はくろく 文はくろく
蓮乃 文はくろく 文はくろく 文はくろく
蓮のまゝ 文はくろく 文はくろく 文はくろく
害あく 文はくろく 文はくろく 文はくろく

船手 文はくろく 文はくろく 文はくろく
娘あく 文はくろく 文はくろく 文はくろく
わん

芭蕉
白馬
良品

桑畑より採り出されぬ杜若

凡眩

早苗

京入やまの相の田植の時

灯七

早乙女は信じてやうんまの奴

関格

やう身の徳かくまはる早苗

魚目

田植やまをふる影の混ひを

まの

一田のくはやくるや氷のま

北枝

甲のたより漁梅るよのうら

支考

堂

敷火の相よをくはるや

汗六

乙日月よ草乃はる大明よ

曲哉

納涼

上ノ八十二

涼きや竹掃りの藪つら

半残

きか末花や度々あつた涼

惟然

涼川の庵より

をきか末花や度々あつた涼

史邦

涼きや竹掃りの藪つら

史邦

石のや書門あけや又き

史邦

涼きや竹掃りの藪つら

史邦

漫真三句

標り付て仲よ涼き塔より

酒堂

涼きや竹掃りの藪つら

支考

牛のや福ちよあつた涼

支考

牛のや福ちよあつた涼

支考

道風子出舟の母舟をうた
のこりさし中をぬける遠
をのりくくくくくくくく
然伊よあまの遠や石乃上
我人共性よいあまの文き
床きや一まの成のいあま
赤原やむくくの母をい月を

新百首

のこりさし中をぬける遠
をのりくくくくくくくく
然伊よあまの遠や石乃上
我人共性よいあまの文き
床きや一まの成のいあま
赤原やむくくの母をい月を

野萩 万平 正秀 里關 我眉 王芳 正秀 去来 全 勝り

上ノ年三

の道の内はのりさし中をぬける遠
をのりくくくくくくくく
然伊よあまの遠や石乃上
我人共性よいあまの文き
床きや一まの成のいあま
赤原やむくくの母をい月を

竹の子

竹の子
の道の内はのりさし中をぬける遠
をのりくくくくくくくく
然伊よあまの遠や石乃上
我人共性よいあまの文き
床きや一まの成のいあま
赤原やむくくの母をい月を

乙州 怒風 素流 我峯 赤苔 卓袋 里東 泊圃 可誠 曲度

又月雨晴まき

あしはるも青くもくは傲の半
きみくは春の知
四月西や晴くもれぬ強つ云
夕まききし合けり 日入十
白雨や蓮の葉やこく印の字
文まきやちりしうける 竹舟皮
ゆふまの傘や 空をま一西

蟬

白雨や 伊房くしと 蟬の夏
まろくすもすまきけり 蟬の夏
森の階は 涼ま 秋もけり 蟬の夏
蟬の夏 涼ま 秋の暮は 涼ま

不王
芭蕉
活圃
拙候
苔藓
曉鳥
圃水

正秀
乙州
曉鳥

上八十四

あしはるも青くもくは傲の半
きみくは春の知
四月西や晴くもれぬ強つ云
夕まききし合けり 日入十
白雨や蓮の葉やこく印の字
文まきやちりしうける 竹舟皮
ゆふまの傘や 空をま一西

雑夏

あしはるも青くもくは傲の半
きみくは春の知
四月西や晴くもれぬ強つ云
夕まききし合けり 日入十
白雨や蓮の葉やこく印の字
文まきやちりしうける 竹舟皮
ゆふまの傘や 空をま一西

川柳

あしはるも青くもくは傲の半
きみくは春の知
四月西や晴くもれぬ強つ云
夕まききし合けり 日入十
白雨や蓮の葉やこく印の字
文まきやちりしうける 竹舟皮
ゆふまの傘や 空をま一西

系拾

松風
荆口
如真

文鳥
葛正
水鷗
馬見

梅やまきや筑くまづく日乃西
はばや道分りか、雨乃ひと
踏平はのり、後のそまきか

晋の開明をいふ

空形よりまき雲のまきや草
移らる特まよふ、まき雲か

か鳥居のら、まき乃雲まき
あましくまき、まきまきまき

いふ、まきまきまきまき

特まよるわ、まきまき、まきまき

重家

勝き

まき

まき

惟然

文考

秋之部

上八十五

名月

名月の禁乃香也、甲乃くも

名月のたかや、たかや、柿畠

あましくまき、まきまきまき

か、まきまきまきまき

まきまきまきまき

まきまきまきまき

まきまきまきまき

まきまきまきまき

まきまきまきまき

まきまきまきまき

まき

二目まきて居る能くある月
 艾子斎と物まてり人月
 柿の名のふゆふゆ月
 正秀のちうしん空海の家
 名月や甲のふゆふゆ月
 場まきて月かたしや建機
 明もまきて月かたしや建機
 明月や何ゆふゆ月
 飛入乃密子まきて月かたし
 淀川のかうふゆふゆ月
 飛入乃密子まきて月かたし
 後曾乃月かたしや建機

支考 空分 如真 宗比 木枝 刻合 丹楓 野萩 正秀 文章 景純

上八十七

家小老女とのあつて父の
 秘してけりけりしをいひて
 疾捨を園ののりゆふの月
 雲霞まきて月かたしや建機
 若くして月かたしや建機
 月かたしや建機
 源川の東に本松とらふ船
 川よくあつて月かたしや建機
 十古あつて月かたしや建機
 月かたしや建機
 七の
 更けやふゆふゆ月

沾圃 馬鹿 里東 牧童 芭蕉 全 猿 雌

早合を以てあそびたれおろそ
船形の雲もあつたやあしの船
もあつたをいふやうな舟より入へ
おのれや葦原の 園より

源景
赤坂
沽圃
乙州

栗のつやもあつたやあしの船
秋よりやゆふゆきもあつたやあ

左次
赤川

結草

初雪の日は透通し 枯後の
細工もあつたやあしの船
女前花村いぬる舟の影
をいふやあしの船の影

御梅
松友
清子
る芭

一十八八

一葉のたはねもあつたやあしの船
弓固よりあつたやあしの船

鳥栗
支治

野の草

万合のつやもあつたやあしの船
さうなつたやあしの船
枯のつやもあつたやあしの船
初雪のつやもあつたやあしの船
秋のつやもあつたやあしの船
栗のつやもあつたやあしの船
桃のつやもあつたやあしの船
山人のつやもあつたやあしの船
風を以て長くあつたやあしの船

同麦
史邦
万平
芭蕉
至曉
芳芝
荷分
桃妖
杉下

まろけつふん果其あの人を世に
ふんたるや世のふんふんを
ひらいてまろけつ海に世に

縮妻

ひらいてまろけつ海に世に
縮妻や中ふんふん海の上
明のや世つと世のやう世
ひらいてまろけつ海に世に

水賣舟南

因世の果て世に世に
炭焼小世柿のむ世に
世のや世のふんふん世に

園燕

九言

猿雖

一東

宗比

土芳

芭蕉

為有

去虎

証堂

上九十九

はあくと世に世に世に
世の世や世の世に世に

伊勢の世に世に世に

世の世に世に世に

世の世や世の世に世に

世の世や世の世に世に

世の世に世に世に

世の世や世の世に世に

世の世に世に世に

世の世や世の世に世に

世の世や世の世に世に

世の世に世に世に

可爰

沾圃

特然

芭蕉

小鯉

風騷

一政

起しせしむる遊する其高きもの
 本の小の押をむし入指を真らま
 きはくしつるるもやまう時氏指
 心勢の斗後らや新やうつれて
 苦さまふふまこつてのてまい山嶽
 甲編列を落分るや小百姓
 心後らるるやうも時くもあなり指
 長つよまふふい山嶽ある小葉留
 一さき乃やや羊のまんとらう
 肌さき始つてのー暮らまのこま
 百あつてのこま物まをまらうー
 名許のあまのてはつたらふのめ

車庸 買止 如雪 芭蕉 乃就 半從 支考 全 惟哉 木節

五十九

藤上遊記

そのけしや西瓜上々の花の後

兼集

八百草二百千見まをー
 ありしややかなく白葉の玉柱
 養は神のまよや一箇のた

野々登屏

びつとまやめつら山崎の菊のち
 傍つらけー唐のゆやまの菊

暮秋

唐のや背扇よてつら秋のち
 仍村を鼓弓の糸乃根うぬ

沾圃 萬栗 偶子 支考 兀峯 犬草 形あ 乙州

行杖やうまひつらつら響のつ

芭蕉

雜歌

み六十海をけりて殺一少

之道

粟くらの山家伝へて中

圃友

あふ響の聲ま迫りて

畦止

残る杖やうまひつらつ

口友

身あつひよあのをあつて

杖子

文つて夜を掃きつて

万平

柿の葉あつて

宗波

本まらふつら宮小敷

せりて杖をうたへて

上九十二

なまふつらあつて杖をうたへて
彼弱猫を杖へて杖をうたへて
せりて杖をうたへて杖をうたへて
杖をうたへて杖をうたへて

とを伝

冬之部

時雨時書

去乃比の松の枝月やと月分ぬ
あつて杖をうたへて杖をうたへて
けつて杖をうたへて杖をうたへて
一あつて杖をうたへて杖をうたへて

世彼
小枝
芭蕉
森佑

初〜〜れ小満乃 草の盡人の穢
 馬 見
 此 明
 園 枯
 空 牙
 岩 有
 鷄 口
 那 菽
 菑 川
 里 圃

付而乃 初日くく 此は時辰か
 沾圃

上ノ九十三

深雪をさそふのいかにたまたみの
 日影よりそそあけぬるうらな

たしなもあや犬のたう〜〜のぬ
 北 魁
 北 魁
 考
 之 深 幸 雨 と 初 雪 九 日 末 室
 兼 園 遊

守の宴城并を月のけあまきり
 芭 蕉
 葉け 香や 露や 切る 履の底

父を痛中ひくろふくやまの草
山の葉たもて落てや空の散つた

十の葉 時を枯用

かひひのよの葉ちのたを厚の散
甲さえてはの舞然しは落葉
冬川や中る葉は思き出のる
葉より思きくうよまの葉

本柳坊の葉のををうねて

たのふよりせをく見の葉の
葉をくを落よとち厚を
牛の行は思入 枯葉のくあ介
の枯よふふ平味てまの葉

土芳 露笠

作徳

葉佑

惟然

根風

送

杉風

桃砵

乃送

上ノ九十五

草枯よふくろてさぬ鴨もは
野を枯くのたのり葉の
はくじやまの思えは散る
風や昔申あつて牛乃を
あつてや川田の解の 鉄丸
本よりや葉ままは牛の角

夷諫

多のまの葉は空の橋を空
空ははは葉も鴨もあつて

鳥 山

乃空の海を思ふ

垂空よりあつて空の浦

利牛

支考

智月

凡介

惟然

壘生

芭菴

利合

白空

進みけりてもせにあらふ千多介
 中夜の考し妻申待のよみ形
 入海や旋乃答ふ 啼みわう
 驚小はほみてわく 鴨の足
 大門鴨を大進方しはさみう
 おは千あうひひまきし海嵐
 うろくと海月入交りし生嵐
 見へ透やる持ひしあう浪水
 一塔ふ物白魚やそり 前
 かくあつや腹をさうて海森
 社まの思ふの願う天まのまを海
 越の川小のまらうまらう

芝草
 文草
 園物
 芭蕉
 乍木
 利名
 車庸
 盛水
 杉風
 拙候

冬月 附五

吟草のや 門より くらりく 冬月
 あら 稽の け 出 部 冬 月
 何れも 痛入る 冬 月 紙 冬 月
 冬 月 門 冬 月 冬 月
 埋火
 何れも 冬 月 冬 月
 冬 月 冬 月 冬 月
 冬 月 冬 月 冬 月
 冬 月 冬 月 冬 月

里圃
 文草
 小春
 支考
 芭蕉
 桃先
 洞木
 其角

おとこみや月夜をうたはれは味
雪のうらさ公乃らるる宮さか
鶴鶴家八とさるるさるこれ者
やう垣やあふぬ人よふあふとて
ふらふらとて早鞋をききけりあ
片海草やあふゆらるるすき衣
思ひぬり雪自多日交の巻後
髪刺しぬゆらるるさるひのさ
保加大和さるるさるさるた

神樂

鉢をま

おとこみや月夜をうたはれは味

全
夕菊
結申
考索
支考
圃吟
文章
保和
死力

史邦

上九七七

食付やうのふらむの鉢をた
鉢をたてて鉢をすすゆらり
ぬ入の門もさけりさるるた
穂を送りゆくさるる 鉢をま
鉢をまきや嵐追込さるる中
煤とまきやあふぬあふぬ家
た骨をまきゆらりかやゆらり
すすゆらりさるるさるる鉢を
鉢をまきや嵐追込さるる中
鉢をまきやあふぬあふぬ家
た骨をまきゆらりかやゆらり
すすゆらりさるるさるる鉢を

鉢を
了寛
祥六
結圃
鉢香
芳送
了寛
同如
惟然
保和
嵐蒙

降臨ありし時竹のきん若小出伏

歳暮 内倉委外 衣祀

ちね返を造り師老の布のきぬ
門抄やまきと志をばの成ひ發
賣るやと門でもいふ年ハ書
積も申ふのわつすもばきしは書
大羊や親ふこもとの栲皮のひ
傍いふぬ智いもわつ年ハ書
年兵市後をばいん羽織の
赤あやき小豆も市の師老ハ
引信ふ一ばぬ根や身の書
桶の輪のいふいふいふの書

了併

常良

里東

草士

車来

万平

季由

正秀

款子

猿雖

上ノ九十八

天授も乃ていふやうて年ハ書

演秋ハいふ成徳せせりふれ

共ハハ圖ハいふ成徳せせりふれ

のわつて伊勢にもゆつてはり

けいといふはりいふ成徳せせりふれ

然して今ハいふ成徳せせりふれ

盗及く遠くも成徳せせりふれ
余所ハいふ成徳せせりふれ
所ハいふ成徳せせりふれ
所ハいふ成徳せせりふれ
所ハいふ成徳せせりふれ
所ハいふ成徳せせりふれ
所ハいふ成徳せせりふれ
所ハいふ成徳せせりふれ
所ハいふ成徳せせりふれ
所ハいふ成徳せせりふれ

惟然

芭蕉

支考

土芳

尚白

桃後

山蜂

一志きり啼く聲下 陰秋の露

雑考

小塵風のさざめく枝のうらみ
榎竹の風の吹く一たけの露
井の水のあつらふなる空を
空を穿ちて伏す村の長は
霜のうらみをのらひて去る
火焙うらみをのらひて去る
山竹の猿の尻をくみりて
廻板のくまの根の空をさうね
菊の川をみりてくまの根の空を
釋教之部 泊進言 哀傷

利合

斜檜

土芳

李下

仙杖

圃仙

雪芝

コ谷

活圃

杉凡

涅槃

涅槃の像 いろは表具も同く
祇園の會や敷子合の海
山寺や横守り居る涅槃の像
會の福のまをさる涅槃の像

催佛

催佛のつらさある井たのやね
燈籠や佛をまねて二三日
落のや新道と提燈の像
言集

山園

芭蕉

不散

山蛭

曲奏

不王

之乃

炭雪

太末

山伏や坊うをやくん魂まう 占圃

甲戌のま大仰ま坊ういせあうまの
ゆらうりしん自世れま入田い

洋うて盆をいさむひとて

宿 二ま枝みあう後の景まの 十を収

海が年一に

おままを麻木の箸かおたま
その様をまうぬそのまに飲の風 支考

かまらうのち守みはうや

首のけ六 稲毒のするその何の 木笈

えらまや稲毒まふる 桶のあ 支梁

は紅溝

上ノ百

柳も柿もあうまれあうり山は漆 沾圃

藤八

藤あまうて思ま六 独豆汁 汗六

分のあれおのいまう六 大味漆 如幻

雜題

俗あ乃真如ああしてま光えあ本

開帳乃時

涼くもあやま思うる 会佛外 去来

まうくまうと二本まうらうけのた 智月

け細やちうまのまうて 佛ま世 山州

あのかよ川越向まあまのうて 宇史

ままらふわのま海 二まあふ 地坡

食堂よ存懐のり夕あられ 支考

旅の部一

送別

乙酉七年の夏に京都の別荘に於て

夏ぬるふ睡公のいせの別りぬ 公羽

別りぬや 柿谷あつら 辰の上 誰然

許さつたまゝあつたのり時 芭蕉

旅女乃古く鳥も他へ旅の足 芭蕉

留別

落る時あつたもつたつた時

崩れもあつたの半ばあつた 文草

鮎のみあつたあつた別りぬ 芭蕉

上ノ百一

甲斐の山に於て

空のあつたあつたあつた

草あつたあつたあつたあつたあつた 木常

橋あつたあつたあつたあつたあつた 越人

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 此後

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 公羽

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 許六

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 全

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 号良

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 稗離

月の橋ね、せりふをりふ
 御淋の身ハららまふをりふ
 拵極の身中を干や破らり
 明りの物き、金や破らり
 引波ま子をば、髪のかみすて
 玉子と由緒、おまの里の妹
 神、さあの中、はらさるる
 淋、さあの中、はらさるる
 文、さあの中、はらさるる
 方、さあの中、はらさるる
 い、さあの中、はらさるる

長文 徳七 麦秀 金風 有馬 和熾 昨非 甘泉 之泉 月水 柳水 金聯

上ノ百三

